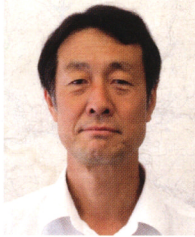




日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2011.10 第45号



提◆言

震災を機に想うこと

日本SPF豚協会副会長
（株）シムコ育種技術部長

鈴木 保

3月から続く東日本大震災の爪痕は未だに塞がることなく、特に原発の放射能漏洩問題は出口の見えないトンネルを走っているようで、地元の皆さま方の生活に対するモチベーションの維持もすでに限界にきているのではないのでしょうか。被災された皆さま方には、お悔やみと早期復帰・発展を心よりお祈り申し上げます。

当社も宮城県と福島県の2農場が被災し、養豚場としては最大級の被害となりました。

この未曾有の惨事を教訓として、我々は飼養形態について根本的に見直す必要があるのではないかと考えています。

何と言っても、最も影響の大きかったのは電力供給の問題です。停電が数時間の場合の対応は可能なものの、数日となると現状ではどうにもなりません。飲水・空気・飼料の供給など電気依存度の高い施設では、自家発電機やそのエネルギー源としての軽油・ガスなどの備蓄が必要となります。特に飲水については十分量の貯水槽と共に揚水ポンプ用の自家発電機を備えるべきでしょう。飼料給餌についても同様のことが言えます。

また、事務所機能の停止は通信のみならず入浴まで不可能となり、防疫に大きな影を落としました。空調については開放式では問題ないものの、ウィンドレス舎では自家発電に依存せざるをえません。十分な軽油等のエネルギー備蓄は、経済面だけでなく多くのコンプライアンスの壁もあり、簡単には設置できません。

それゆえ、今後の豚舎は完全なウィンドレス構造がよいのか、開放式に切り替えられるセミウィンドレスがよいのか検討の余地があります。

このように、電力の自己調達とはとても重要ですが、施設環境だけでなくもっと根本的な環境設定に目を

向ける必要もあります。

今般SPF豚と言えども投薬に依存した過密飼育になりがちで、それゆえ連鎖球菌症や浮腫病など別の疾病蔓延による事故増と薬品増が発生しています。

豚舎のロット管理やオールイン・オールアウト化は進みつつありますが、1頭当たりの飼育面積や豚舎内または農場内での総飼育頭数の制限を厳しくすべきだと考えています。出荷体重は年々伸びつつあり、遺伝的な発育能力も上がっている現在の豚では明らかに飼育密度を下げ、1頭当たりの飼育面積を広げる必要があります。

このことは、空間の拡大のみならずウィンドレス豚舎での換気量アップと同じ効果があり、同時に舎内の菌量減少にもつながります。

特に、大きな災害など通常の作業が維持できなくなった環境においては、飼育面積の適正は大きく多方面に貢献することになります。そもそも過密飼育が必ずしも低コストには直結しませんし、良い肉質になるとは思えません。

我々はこの機に今後の飼養形態の見直しを行い、適正とは何かを追求していきたいと思います。現在秋田県に建設中の新GGP農場は、セミウィンドレスとはなりませんでした。ロット管理はもちろんのこと飼育面積その他十分に考慮して設計されています。

FTAやTTPが迫るこのような時だからこそ、国際競争力を示せる素材や人材を育て、消費者から望まれるものを生産することが、明日につながるものと確信しております。凄まじい養豚の発展を続ける東アジアにあって、日本の養豚家の皆さまと共に一歩でも前に進み、競争に勝てる種豚・豚肉を生産できるよう努力を続けたいと思います。

S P F 豚セミナーを開催します

災害時の農場防災・防疫をメインテーマに

11月15日(火) 東京・KKRホテルで

日本SPF豚協会では今年も恒例のSPF豚セミナーを次ページの通り開催いたします。

3月に発生した東日本大震災から7か月近くが経ち、多くの人々の努力で少しずつ復興が進む一方で、まだまだ問題山積の状況にあり、当事者のご苦勞はいかばかりかと心よりお見舞い申し上げます。一日も早く心安らかな暮らしに戻れるよう切に願っております。

該当地域の協会認定農場も甚大な被害を受けたところも少なくありませんが、会員の努力と関係各位の速やかな対応によりほとんどの農場が短期間で見事に立ち直られています。

震災の他にも台風やピンポイント豪雨による大雨被害など歴史的災害が相次ぐ今年、災害時の対策、さらに防疫について考えることは、重要ではないかと思えます。そこで今年のセミナーのメインテーマとしました。

まず、基調講演として「災害時における防疫・防災のあり方」(仮題)について、秦 政弘・協会副会長に講演いただきます。宮城県にあるサンエスブリーディングピラミッドのGP農場も被災。停電対策、燃料確保、防疫維持のために秦副会長も泊まり込みで陣頭指揮に当たられました。日頃の防災対策が被害を最小限に食い止められた大きな要因の一つとなったようです。貴重な体験をお話させていただきます。

また、パネルディスカッションも行ないます。パネリストは岩手・宮城・福島認定農場で大きな被害を受けられた方々です。「東日本大震災の体験を活かして」(仮題)をテーマに、被害状況、回復の道のり、認定農場ならではのご苦勞などをお話させていただきます。未曾有の危機をどう乗り越えたのか、その体験を今後の農場の備えにどう活かすのか、意見交換していただく予

定です。

地震列島ともいえるわが国において、いつどこで同様な災害に見舞われるかわかりません。他の地域の方々にとっても大変参考になるのではないのでしょうか。

セミナーではCM農場の生産成績年次報告や、生産成績最優秀CM農場の表彰なども例年通り行なわれます。

CM農場の生産成績年次報告は、今や貴重なデータの蓄積となっている協会認定CM農場の成績の推移、傾向、特徴などを分析・報告いたします。

CM農場の表彰は3年間連続して総合生産指数が上位25%に位置し、A薬品費の使用が基準値を下回る農場を対象に、3年間の指数の平均が最高の農場を総合生産成績最優秀農場として、また同様に1母豚あたりの出荷頭数が3年平均で最も多かった農場を商品化頭数最優秀賞として表彰するものです。5回目となる今年、先に行なわれた選考委員会では、通常の表彰の他に、農場の励みとなるような新たな表彰基準も検討されましたが、今回は見送られ、今後データにもとづき検討していくこととなりました。当日選考委員長である柏崎守SPF豚農場認定委員長より講評いただきます。

セミナー終了後には恒例のSPFポークをご賞味いただく懇親会も開催いたします。毎回大変なご好評をいただいている認定農場産SPFポークのしゃぶしゃぶ、ハム・ソーセージなどの加工品も多数ご用意いたします。この機会にぜひご賞味下さい。

貴重な情報が得られるまたとない機会かと思えます。会員はじめ多くの皆さんにぜひご参加いただきますよう、ご案内いたします。

平成23年度SPF豚セミナー開催要項

日時 平成22年11月15日(火) 13:00~17:00

場所: KKRホテル東京(地図参照) 11階「孔雀の間」

プログラム

- 開会のあいさつ 13:00~13:10
- 「認定農場の生産成績年次報告」 講師: 藤田 世秀・日本SPF豚協会専務理事 13:10~13:40
- 基調講演「災害時における防疫・防災のあり方」(仮題)
講師: 秦 政弘・日本SPF豚協会副会長 13:40~14:40
(株)サンエスプリーディング代表取締役)
- 休憩
- 生産成績優良農場表彰式 ・生産成績上位農場の解説 15:00~15:30
・選考結果報告、講評
・表彰(表彰状・トロフィー授与)
総合生産成績最優秀農場
商品化頭数最優秀農場
- パネルディスカッション「東日本大震災の体験を活かして」(仮題) 15:30~17:00
パネリスト(敬称略・順不同)
大泉 俊昭((農)八幡平ファーム)、秦 政弘(サンエス丸森農場)
石川 輝芳((農)しわひめスワイン)、明石 徹(株)シムコ岩出山事業所)
川島 力(株)ユキザワ玉川農場)

コーディネーター: 赤池 洋二・日本SPF豚協会最高顧問

セミナー会費: 無 料

◆懇親会◆ 17:00~19:00 11階「丹頂の間」

・会費 5,000円

<お申し込み方法>

同封の申し込み書にて下記までFAXでお申し込み下さい。

●申込期日 11月8日(火)必着



お申し込み・お問い合わせ先

日本SPF豚協会

FAX 03-5835-5376

〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
ニューセンチュリービル7F
TEL 03-5835-5375

KKR HOTEL 東京

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1

TEL.03-3287-2921 FAX.03-3287-2998

交通のご案内

●地下鉄東西線竹橋駅3B出口から専用通路●首都高速環状線神田橋出口から2分●JR東京駅(丸の内口)から車で5分

大腸菌による新生期下痢①

東京農業大学教授 山本 孝史

本病は通常0～4日齢、遅くても2週齢までの子豚が罹患します。重篤度は発病日齢によって異なりますが、3日齢以内に感染すると重度の脱水と敗血症のため、死亡率が70%以上にもなる経済的被害の大きい疾病です。

原因と発病要因

原因となる大腸菌は、前号で記載した離乳後下痢と同じグループの大腸菌で、エンテロトキシンを産生する腸管毒素原性大腸菌 (enterotoxigenic *E. coli*: ETEC) です。本菌群は、線毛 (抗原性の違いによりF4, F5, F6, F41などの種類があります) によって小腸粘膜に付着、定着して増殖し、エンテロトキシンを産生して下痢を起こします。同腹豚が同時に発病することが多いですが、これは感染源が母豚の糞便や糞便で汚染された床などの環境なので、同じような時期に感染するからです。

すなわち子豚は、分娩後母豚の乳房にたどり着くまでに汚染された床や母豚の皮膚から感染し、その後も常に同様の感染機会に晒されています。したがって本病の予防には、分娩豚房が母豚の糞便で汚染されないよう毎日の衛生管理を徹底させることはもちろん、空房期間中に洗浄消毒を徹底して、病原体が蓄積しないようにすることが重要です。母豚が、原因となる大腸菌に対する抗体を持っていれば初乳を介して子豚に移行して感染を防ぐことができますが、そうでなければ子豚は感染し易くなります。初産豚の産子で発生頻度が高いのは、母豚が若いため線毛の異なるさまざまな大腸菌に遭遇する機会が少なく、原因菌の線毛に対する抗体を持っていないことが多いからです。同様に母豚が抗体を持っていても子豚が初乳を十分に飲めなければ抵抗性は付与されないのですべての子豚が初乳を摂取できるよう配慮しなければなりません。

また、環境温度が25℃を下回ると子豚の腸管は蠕動

運動が大幅に低下して細菌や防御抗体が腸管を通過する速度が遅くなるため、大腸菌は腸管内に長く留まり、また防御抗体が到達するのが遅くなります。その結果、30℃で飼育されている豚よりも腸管内の大腸菌数が多くなり、下痢症状がより重篤になります。

症状と病変

早い場合は生後2～3時間、通常は生後1～2日に突然下痢が見られますが、最初は、肛門から会陰部に流れる程度の少量で注意深く観察しないと気が付かない場合があります。黄色軟便、白色粥状あるいは粘液様を呈しますが、下痢便中に血液や腸管粘膜の剥離片が含まれることはありません。重篤な場合は、体重の30～40%が

水様下痢として失われて急速に脱水症状を示し、敗血症となって1日以内に死亡します。剖検すると、胃には凝固したミルクが見られることが多く (写真1)、腸管は弛緩し、水で満たされています (写真2)。(以下次号)



写真1 胃の中の凝固したミルク
(原図: 参考文献)

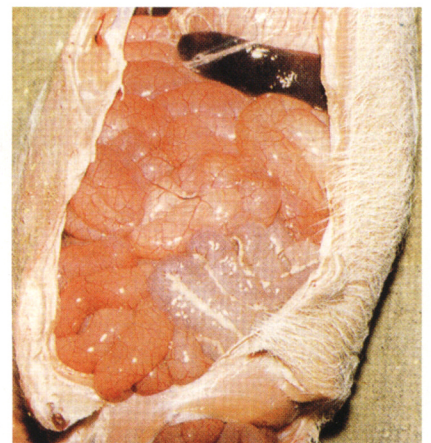


写真2 腸管は弛緩して水で満たされており被毛は脱水のため粗剛化している
(原図: 参考文献)

<参考文献>

Smith, W. J. et al. (1990). A color atlas of diseases and disorders of the pig. Wolfe Publishing Ltd., 96-97.

豚舎で繁殖するネズミの種類とその生態

イカリ消毒(株)技術研究所 春成 常仁

豚舎内は餌が豊富にあり、温度も一定であるためネズミにとって繁殖しやすい条件がそろっています。特に壁の内部、断熱材の中、コンクリートと土の間など隠れ場所が豊富にあるため、豚舎内に侵入したネズミは定着しやすくなります。ネズミの繁殖力は旺盛で、一度豚舎内に定着すると短期間で生息数が急増します。ネズミが毎日出没するような場所では糞や足跡のほか、一定の通路を移動する時に体表面の汚れが壁などに付着してできるラットサインが確認できます。

ネズミが豚舎に生息した場合の被害として、飼料の食害、配線ケーブルの咬害、子豚への咬害など経済的被害や、オーエスキー病、口蹄疫、サルモネラ症などの豚の疾病の病原体を伝播することが知られています。

わが国では18種類のネズミの仲間が知られていますが、豚舎で問題となる種類はドブネズミ *Rattus norvegicus*、クマネズミ *R.rattus*、ハツカネズミ *Mus musculus* の3種です。これらのネズミは種類により生態が異なるので、駆除対象のネズミの種類を把握することは防除を実施する際に重要な情報になります。

ドブネズミ (写真1,2)

ドブネズミは最も大型で体重250~400gほどになります。形態的な特徴として、尾が体長より短く、耳が小さく前に倒しても目に届かない点が挙げられます。もし、子猫ぐらいの大きさのネズミが地面を移動していた場合、本種の可能性が疑われます。性格はどう猛で子豚を襲うこともあり、飼料も食害されます。生息場所は、水辺を好み、泳ぐことも可能です。営巣場所は開放的な豚舎や周辺の側溝などのコンクリートの割れ目、土盛りした斜面、柔らかい土面や側溝などに穴をあけて営巣しています。生後約3カ月で繁殖能力を持ち、1回の産仔で約9匹を生みます。



写真1 ドブネズミ

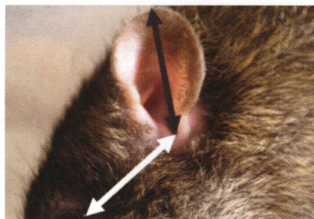


写真2 ドブネズミの耳 (灰色矢印: 耳長、白矢印: 耳から目までの長さ)

クマネズミ (写真3,4)

クマネズミは体重100~180gほどの大きさで、形態的な特徴として、尾が体長より長く、耳を前に倒すと目に

届く点が挙げられます。本種は立体的な移動が得意であり、パイプや表面が荒い壁などを使って垂直に高所へ移動するネズミが見られれば本種と思われます。生息場所は寒さに弱いため、屋内の場合が多く、特に冬場は寒さをしのぐために建物への侵入の危険が高まります。営巣場所は建物内の高所にある場合が多く、天井裏、壁の内側に営巣しています。性格は警戒心が強く、豚舎では最も防除が難しい種です。生後約2カ月で繁殖能力を持ち、1回の産仔で約5~6匹を生みます。



写真3 クマネズミ

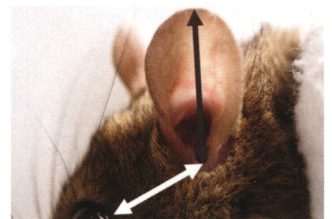


写真4 クマネズミの耳 (灰色矢印: 耳長、白矢印: 耳から目までの長さ)

ハツカネズミ (写真5、6)

ハツカネズミは、成獣でも体重20~35gほどのネズミで、前の2種の幼獣よりさらに体が小さいです。形態的特徴として、耳が大きく、尾が体長より短いか同じくらいである点が挙げられます。また、門歯を横から見ると先端に鋭いへこみが確認されます。生息場所は畑地や草地とその周辺です。豚舎では周囲にこれらの環境がある場合に侵入してくることがあります。なお、本種は非常に乾きに強く、水が少ない環境でも生存可能です。体が小さいため、子豚を齧ったり、ケーブルを齧ったりといった経済的被害は少ないですが、1cm程度の隙間からも侵入できます。生後約5週で繁殖能力を持ち、1回の産仔で約6匹を生みます。



写真5 ハツカネズミ

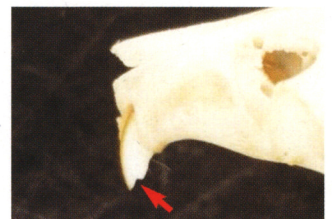


写真6 ハツカネズミの門歯のへこみ

<参考文献>

ネズミ駆除協議会 (2006) 家ネズミ用語辞典. ネズミ駆除協議会、田中生男 (1992) ネズミとその駆除. 日本環境衛生センター、谷川 力 (2007) 有害生物防除事典. オーム社、中村高志 (2010) 養豚の友平成22年9月号ネズミが媒介する病原体とその対策. (株)日本畜産振興会

● 協会からのお知らせ ●

● ちくさんフードフェアに出展

10月8(土)、9(日) 川崎：食肉流通センター

協会では、10月8日(土)、9日(日)の2日間、神奈川県川崎市の(財)日本食肉流通センター内で開催される「ちくさんフードフェア」(川崎みなと祭りと同時に開催)に出展いたしました。

このフェアは同センターが現在の川崎市東



扇島に建設されたのを機に、地元の消費者に対し、食肉への理解や販売促進のための機会として行なわれるようになったもので、今年は30回目の記念開催となりました。野外バーベキュー、牛肉・豚肉の販売、全国味めぐりコーナー、家畜ふれあい牧場などの催しがあり、例年10万人近くの来場者を数えるそうです。

協会は一昨年に初めて出展し、SPFポークの普及・促進を図るため、パネル展示やしゃぶしゃぶ・生ハム等の試食、アンケート調査などを実施しました。

SPF豚肉をたっぷり使った試食は大好評で、協会ブース前には長蛇の列ができました。

今年は2回目の出展です。スペースを拡大し、前回同様パネル展示、しゃぶしゃぶの試食、アンケート調査、パンフレット・リーフレットの配付、販売店情報等の提供、くじ引きなどを行ないました。

詳細は次号でご紹介いたします。

● 認定委員の就任・交代

協会の前会長で現最高顧問の赤池洋二氏が、SPF豚農場認定委員会の学識経験者委員に就任されました。

また、ホクレンピラミッドの認定委員が真鍋伸男氏から渡辺卓俊氏に、伊藤忠飼料ピラミッドの認定委員が小林一彦氏から鈴木育美氏にそれぞれ交代いたしました。

● 柏崎認定委員長が養豚功労賞を受賞

SPF豚農場認定委員会の柏崎守委員長が、日本養豚学会の養豚功労賞を受賞されました。協会関係者では3年前の赤池洋二前協会会長に続き2人目となります。10月15日(土)、神奈川県厚木市の東京農業大学で開催される日本養豚学会大会において表彰式が執り行われます。

DVD GUIDE

『畜産は宝だ！』

口蹄疫に負けない日本の畜産をみんなの力で

企画：JAグループ 家畜疾病にかかる全国団体対策本部

事務局・JA全中

制作：全農映

DVD60分

価格 2,000円(税込、送料込)

日本の畜産界を大きく揺るがした、昨年春の宮崎県における口蹄疫発生。家畜29万頭の殺処分という前代未聞の事態となりました。

悲しい教訓を活かし、二度とこのようなことを繰り返さないためにも、全国のすべての畜産農家に高い防疫意識が求められます。

このDVDはJAグループ家畜疾病にかかる全国団体対策本部が口蹄疫の防疫対策をまとめたもの。①「そこが知りたい口蹄疫～見えない敵(ウイルス)か

ら農家と産地を守る」②

「口蹄疫から農場を守る

日常の防疫管理の徹底

解説」③「疑似患畜の

早期発見方法と疑似患

畜発見後にすべきこと

」の3章で構成され、

口蹄疫対策に必須の

情報が網羅されてい

ます。

畜産農家必見の作品です。



● 問い合わせ・申し込み先 ●

全農映

東京都千代田区内神田1-2-6

TEL 03-5281-8781 FAX 03-5281-8780

たっぷりSPF豚肉と揚げ出し豆腐

●レシピ提供・「豚料理よろずや」料理長 西澤一暢（北海道札幌市）

今回はSPF豚と揚げ出し豆腐の取り合わせです。鴨肉や鶏肉を使ってそば粉や片栗粉をまぶして煮る金沢の郷土料理「治部煮」をアレンジしてくれました。

●材料●

SPF豚バラスライス 200g
木綿豆腐 180g
万能ねぎ 適量
大根おろし 適量
刻みのり 適量
もみじおろし 適量

<煮汁>

だし（水）540cc
しょうゆ 90cc
みりん 90cc

●作り方●

- ① 豆腐は8つに切り、軽く水を切ります。水を切り過ぎるとコシがなくなるので全体の3割程度が目安。
- ② 切り分けた豆腐に片栗粉をまんべんなくまぶし、余分な粉は落とします。
- ③ 180℃に熱した油に静かに入れ焦がさないように上下を返します。浮いてくる泡が少なくなってあげ色がついたら取り出します。
- ④ 豚肉は3等分に切り片栗粉をまぶします。鍋に煮汁を入れひと煮立ちしたら豚肉を重ねならないように入れ中火で煮込みます。豚肉が浮き上がってきたら取り出します。
- ⑤ 器に豆腐と豚肉を盛り、煮汁をかけます。万能ねぎ、大根おろし、刻みのり、もみじおろしなどお好みで添えてできあがりです。

【西澤シェフからのアドバイス】

豆腐の水気を抑えるために片栗粉はまんべんなくつけます。豚肉の片栗粉はつけすぎないようにしましょう。



●認定情報●

●平成23年度認定農場

[9月認定] (有効期間:平成23年9月8日から24年9月末日まで)

北海道・ササキSPFファーム、(有)山中畜産長沼農場、(有)浅野農場、(有)フロイデ農場、(有)道南アグロ栗山農場、
岩手県・全農畜産サービス(株)東日本原種豚場、(有)ケイアイファウム北上農場、(農)八幡平ファーム、
秋田県・全農畜産サービス(株)秋田SPF豚センター、(株)フカサワ深澤スワインファーム館合農場、(有)ファームランド、
宮城県・(株)シムコ岩出山事業所、茨城県・常陽発酵農法牧場(株)、東京養豚農業協同組合岩井牧場、オヌマファーム、山本ファーム鹿嶋、(有)米川養豚場、(有)奥田農場、
栃木県・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、
群馬県・(有)ほそや、長野県・長野県農協直販(株)SPF種豚センター、(有)岩垂原エスピーエフ農場、(有)タローファーム、(有)クリーンポーク豊丘農場、(農)エスピーエフ

こがねや第一農場、千葉県・(有)東海ファーム倉橋本農場、同猿田農場、同第2肥育農場、同第1肥育農場、(有)菅井物産飯岡SPF農場、(有)下山農場第1農場、同飯岡農場、
埼玉県・(有)松村牧場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産矢下繁殖農場、同上馬場肥育農場、同上馬場一貫農場、
愛媛県・JA全農愛媛県本部広見種豚増殖センター、香川県・(株)七星食品多和ファーム、大分県・(有)九重ファーム、
熊本県・(有)高森農場、宮崎県・(株)ファームテックえびの種豚場、(株)守山畜産、鹿児島県・(株)シムコ鶴田事業所、(株)ファームテック大口農場、(有)新留養豚、
鹿児島いずみ畜産(株)江内農場、そお元気(株)ファーム野方農場、高山大規模実験農場生産農場、同肥育農場

(以上50農場)

※次回認定委員会は平成23年12月8日(木)の予定



北日本JA畜産(株)
本社農場

佐藤 忠さん

●岩手県遠野市

「みんなで力を合わせて笑顔で 危機に立ち向かう」を合言葉に

宮沢賢治が愛し何度も訪れた民話の里・遠野市でも最も奥深い山間に、北日本JA畜産(株)本社農場が稼働したのは平成22年5月。農場面積13.8ha、母豚規模1,200頭で年間出荷2万7,800頭以上の大規模農場です。

佐藤忠さんは全農岩手県本部の職員で、平成19年10月の会社設立から社長に就任され、現在に至ります。

同農場では、日本ではあまり例のない、分娩舎にリキッドフィーディングを導入しています。授乳期母豚へのリキッド給餌の有利性は、母豚の体調や子豚の体重、離乳母豚の発情再帰日数などが優れていることで証明されています。

環境保全への取り組みにも積極的で、農場汚水は浄化槽で浄化した後、広大な蒸散施設へ送り、場外に流さない無排水システムで対応しています。これは水系下流域の環境負荷に最大限配慮したものです。さらに糞処理については消臭装置付きの大型密閉コンポストで急速発酵、十分な養生期間を経て完熟堆肥を生産しています。堆肥は近隣の耕種農家へ優先配布、地域循環型農業を目指しています。「当農場は遠野地域の水系最上流の位置にあるので、環境負荷をできるだけ与えないよう最大限の努力しています」と佐藤さん。

佐藤社長以下、社員は13名、生産現場は津志田場長代理を筆頭に若手で構成され、繊細かつパワフルに作

業されているのが印象的です。

初体験の昨年の厳冬期は、あまりの低温に畜舎床面が凍み上がったリスクレーパーまで凍るなど思いがけない体験も。「豚たちが元気に育ってくれたことが何よりでした」。



3月の東日本大震災は、東北沿岸部に甚大な被害を与え、同農場でも建物の損壊や飼料の枯渇など大きな影響を受けました。特に飼料供給先である北日本くみあい飼料(株)の石巻・八戸工場が共に被災し、深刻な事態が続きました。しかしながら、JAグループの一丸となった復旧復興支援により、何とか生産性を大きく落とさず乗り越えました。佐藤さんは「原動力となったのは、親会社をはじめ全国のJAグループの惜しみない支援と、全国の仲間から励ましの声でした。今なお震災の影響が残り、原発の影響も予断を許さない状況ですが、『みんなで力を合わせ笑顔を忘れずこの危機に立ち向かおう』を合言葉に、社員一丸となって日々がんばっています」と力強く語って下さいました。(全農畜産サービス(株) 佐藤 仁)

編集後記

前々から気になっていたことを、今号の提言で鈴木氏が明快に述べてくれました。過密飼育が必ずしもコスト低減にはつながらないので。過密化による呼吸器疾患、日和見感染症の増加は、大都市における新型インフルエンザの流行を連想してしまいます。豚を健康に育てるためには、SPF豚といえども飼育空間と経済動物のあるべき姿について再考が必要かもしれません。話変わって、東日本大震災に次いで相次ぐ台風による豪雨、今年は天災の年でしょうか。協会だよりでは新連載が始まりました。セミナーにもぜひお越し下さい。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは

日本SPF豚協会の

登録商標です

日本SPF豚協会だより

第45号 2011年10月1日発行(季刊)

発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/

発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀